

建安、三國文學思想の新動向

古川末喜

はじめに

後漢末建安年間から三國鼎立にかけての時代が、文學思想史上における一つの大きな轉換點だと見做されてからすでに久しい。鈴木虎雄氏が「支那文學上の自覺期」(『支那詩論史』)と喝破され、青木正兒氏が「文藝至上時代」(『支那文學思想史』)の冒頭に位置づけられ、魯迅氏が「文學の自覺時代」(『魏晉風度及文章與樂及酒之關係』)と述べられてからは、ほぼ半世紀の時間が過ぎ去った。しかしどういふ根據にもとづいて、どのようにそれが證せられるのかについては、或は感覺的に或は自明のこととしてすまされ、具體的に解明されることは殆どなかつたといえる。また一方では、「典論論文」の文章不朽説をもって文學價値の獨立と稱す、不正確な論法が斯界の通説となるような狀況さえ存在してきた。本論は、右のような建安文論の持つ不十分さや不正確さに、いくらかでも満足な解答を與えようとする動機から出發し、具體的に以下のような問題を檢討することによって、この時代の文學思想の新動向を探らうとするものである。

- 一、不朽説(文章不朽の再檢討、不朽説への關心)
- 二、趣味的文藝觀(曹丕、陳琳、曹植、楊脩)

建安、三國文學思想の新動向

- 三、文采論(文采の一人歩き、吟誦の開始とその意義)
- 四、批評論(批評對象の擴大、個性批評の二つのタイプと二つの個性來源論)

以上の各項目についての具體的檢討の中から、それぞれこの時代がいかように文學認識に劃期的な變化をもたらしたかが自ら證されるであらうし、またこの時代の文學思想を貫く底流が、いかなる方向へ流れこもうとしていたかも自ら明らかになってくるであらう。

(一)

「典論論文」の最後の段は文章の不朽性を説いたものだが、この一段は今日まで曹丕が文學の獨立宣言を表明したものとみなされることが多かつた。だが果たしてこの一段をどのように讀み取ることができ得るであらうか。文脈にそつて虚心に讀めば、この一段が文章の不朽性を稱揚し、聲名を無窮に傳えるため、一家言的文章を著すべく努力すべきだといふ勉勵の言葉であつて、文學の獨立した價値の宣言などは、どこにも述べられていないことが自ら了解されることと思う。初めにこの點を文脈をおさえながら確認しておきたい。

その段の冒頭でまず、

蓋文章經國之大業、不朽之盛事。

『文選』卷五二

と述べる。ここでは文章の經國性と不朽性との二つをあげている。文章のこの經國への效用性の表明は、文章が廣く治國平天下の用に役立つことを指摘した、傳統的な考え方のくり返しにすぎない。そして文章の經國性について言及するのは、二百字弱ほどのこの一段でこの冒頭の一句にすぎず、この一段の主旨が文章の經國性について云々したものでないことは、このことからますます大方の豫想がつく。續けて、文章の永遠性を、

年壽有_レ時_レ而盡、榮樂止_レ乎_レ其身。二者必至之常期、未_レ若_レ文章之無窮。

と述べ、さらにその文章自身の永遠性のために、古の作者は文章を著すことによつて自己の聲名を後世に傳えることができたとして、

是以古之作者、寄_レ身於翰墨、見_レ意於篇籍、不_レ假_レ良史之辭、不_レ託_レ飛馳之勢、而聲名自傳_レ於後。

と言ひ、その後、歴史上でそうした文章著述によつて聲名を不朽にした人の例を二つ、

故西伯幽_レ而演_レ易、周且顯_レ而制_レ體。

とあげる。そしてその成功は彼らの人生の逆境、順境には關わりなかつたとして、

不_レ以_レ隱約_レ而弗_レ務、不_レ以_レ康樂_レ而加_レ思。と述べる。

以上、コメントを加えながら原文を示したように、ここまでの前半は、より曹丕の主旨にそつた形で言いかえれば、個人の聲名は文章著述によつても永遠に後世に傳えることができるということの、論證をまじえながらの堂々たる主張であるといえる。

以下、後半は古人が文章著述のために寸暇を惜しんだのに對して、人間というものは生活に流されやすく當面の努めに勵むだけで、聲名を不朽に傳えるという大事業をおろそかにしてしまい、あたらし生を終える、それは志あるものの大いに悲しむ所だ、と述べる。

夫然、則古人賤_レ尺璧_レ而重_レ寸陰、懼_レ乎_レ時之過_レ已。而人多不_レ強_レ力、貧賤則餓_レ於飢寒、富貴則流_レ於逸樂、遂營_レ目前之務、而遺_レ千載之功。日月逝_レ於上、體貌衰_レ於下、忽然與_レ萬物_レ遷化、斯志士之大痛也。

そして、これに續けて最後の一文を、

融等已逝、唯幹著_レ論、成_レ一家言。

としめくくる。ここでいう「融等」とは、この「典論論文」の序文に相當する所である所謂、建安七子の孔融以下七人の文人を指す。

「已逝」というように、曹丕がこれを書いた時には七子は既に過去の人となつていた。そしてその中でただ徐幹だけが文章著述をして一家言を成すことができたのだという。この口吻には、生前華々しい文學活動を繰り廣げた孔融以下七子も、徐幹を除いて、結局は目前の營みに務めただけで千載の功を忘れさり、忽然と萬物とともに遷化してしまつたのだ、という曹丕の「大いなる悲痛」を感じることができ。或は、曹丕自身が、一家言としての不朽的著述であるこの『典論』を書きあげたことを考えあわせれば、徐幹以外の七子に對して自負を表明し、更には暗に批判をこめてみるとみるのが、より事實に即しているのかもしれない。

以上、縷々述べ來つたように、この「典論論文」最後の一段は、文章著述という大事業によつて、個人の聲名を永久に傳えることができるが、人間は目前の生活に流れやすく、その不朽の大事業を逸しや

すい、というのがその主旨である。従つてこのように考えてくると、ここには文學の獨立を宣言したような發言も見られないし、そうした口調も感じることができないのである。

さて今まで私は、不朽の對象になつてゐる「文章」の意味するものについて、敢て問わぬようにしていたが、實はこれには二つの解釋が對立している。即ち、散文體で論述され、政治、社會、道徳に有益で、量的にあるまとまりをもつた諸子的な文章、即ち一家言的著作だけを指すという解釋と、それに加えてさらに、ほぼ今日と同じ意味での文學の意味をも含むという解釋とである。そしてこの二つの意を合わせ持つ後者の解釋が、日中の斯界の大勢であり、その立場に立つ人はこの「文章」に文學の意を含めて考える所から、文章不朽説を文學不朽の宣言、さらに文學の獨立宣言へと横すべりさせていくものようである。しかし私はそうではなく、上述した文脈上からの理由及びその他の理由から（後述）、この場合の「文章」は當然一家言的著作だけを指していると考ええる。これを最初に證されたのは恐らく網祐二氏であり、それを發展させ、さらに文學思想史的觀點からも新しい意義づけをされたのは岡村繁氏であろう。従つてその考證は兩氏に譲り、ここでは繰り返さないことにするが、ただ二、三の新たな論據をもつてこの立場を補強しておきたい。

曹丕は、徐幹の『中論』を不朽と見做したが、「中論原序」によれば、それはまさに文學を廢し、文學と對立するものとして作られたものだったのである。

君の性、常に世の有餘を損し、俗の不足を益さんと欲す。辭人の美麗の文の時に並びて作り、曾て大義を闡弘し、道教を敷散し、上は聖人の中に求め、下は流俗の昏を救う無きを見て、故に詩賦

頌銘贊の文を廢し、中論の書二十二篇を著わす。

『全三國文』卷五五

このことから、文章不朽が一家言的著作を對象としていたことが、逆に證明されるのではないか。ただ「中論原序」が除外したのは、詩賦頌銘贊の韻文體だけであつて、散文體は必ずしもそうではないが、これは一家言的著作が散文體で書かねばならないことその他に、「中論原序」が「美麗之文」即ち文學と考えるものが、韻文體に他ならなかつたからである。また、桓範は曹丕の『皇覽』編纂にも參加したことがあるが、『世要論』序作篇に次のようにいふ、

夫れ著作書論は、乃ち大道を闡弘し、聖教を述明せんと欲し、事義を推演し、情類を盡極し、是を記し非を貶し、以て法式と爲す。當時行なうべく、後世修むべし。且つ古は、富貴なるも名賤しく廢滅するもの、記すに勝るべからず。唯篇論の倣儼の人、不朽爲るのみ。……而も世俗の人、體を作すを解せず、汎盜の言に務め、有益の義を存せざるは非なり。故に作者は其の辭麗を尙ばずして、其の道を存するを貴ぶなり。其の巧慧を好まずして其の義を傷るを惡むなり。

『全三國文』卷三七

ここで彼が不朽と考えているのは「篇論倣儼の人」であり、「著作書論」である。その中身は、大道をひろめ聖教を明らかにするもので、且つその著述態度は表現の美しさを追求するのではなく、聖人の道を存することを尊ぶべきだといふ。このことから、桓範が不朽と考える文章もまた、文學とは對立する一家言的著作であつたことがわかる。

さらに時代はやや下るが、晋代きつての美文の大家の陸機も死に臨んで、

窮通は時なり。遭遇は命なり。古人言を立つるを貴び、以て不朽と爲す。吾が作す所の子書、未だ成らず。此を以て恨みと爲すのみ。

『太平御覽』卷六〇二と述べたが、ここでは立言_一子書_二不朽であることがはっきり示されている。また劉勰も『文心雕龍』諸子篇で、諸子の散文を、聲名の没するのを嫌う英才が、文を垂れて名を不朽に傳えたものだと言へ、一家言的文章をこそ不朽の觀點でとらえている。

以上のように文章不朽説が一家言をさすものだと言へば、「典論論文」の文章不朽説は儒家經典『左傳』襄公二十四年にある三不朽説、

太上立德有り、其次立功有り、其次立言有り。

という傳統的な立文不朽説の、未だ枠内にあることになり、岡村繁氏と同様、私もこの文章不朽説をもっては、文學の獨立宣言だとみなすことはできないと考えるものである。

このように文章不朽説が一家言的著作のみ對象としており、文學作品をその對象からはずしていたということは、文學にはまだ不朽性の機能、即ちそれによって個人の聲名を無窮に傳えるという機能が、はっきりと認識されていなかったことを示すにすぎない。今日では優れた文學には不朽性があると考えるのが普通だが、中國古代の文人にそういう認識が生まれてくるにはもう少し時間を要した。しかし、だからといって曹丕が文學を否定したり、低く見たなどというのではもちろんない。曹丕が文學の價值について直接發言した資料は見いだせないが、彼が積極的な文學的諸活動を行なっている事實から、ある次元、ある場面においては文學を少なからず重視していたことは十分に推測することができる。

これについては次節以下で検討することにして、まずこの時代にな

ぜ傳統的な三不朽説が、再び注目されるようになったのかについて考えてみたい。というのは、文章によるうと功德によるうとに關わらず、この時代に不朽説を唱えるものが俄然多くなるからである。不朽説は、あたかも漢末から三國時代にかけての時代思潮であるかのようだ。曹丕自身もさらに王朗への手紙で、不朽に對して第一に立德、第二に立文と序列をつけながら、

生まれて七尺の形有るも、死しては唯一棺の土のみ。唯立德揚名のみ、以て不朽たるべし。其次は篇籍を著わすに如くは莫し。

と述べている。曹植も次の二つの資料をつきあわせて讀めば、第一に功德、そして次に一家言的文章によって不朽を願っていることがわかる。

吾雖_一德薄_二、位爲_三藩侯_四、猶庶幾勳_五力上國_六、流_七惠下民_八、建_九永世之業_{一〇}、留_{一一}金石之功_{一二}、豈徒以_{一三}翰墨_{一四}爲_{一五}勳績_{一六}、辭賦爲_{一七}君子_{一八}之業_{一九}。若吾志未_{二〇}果_{二一}、吾道不_{二二}行_{二三}、則將_{二四}采_{二五}庶官之實錄_{二六}、辯_{二七}時俗之得失_{二八}、定_{二九}仁義之衷_{三〇}、成_{三一}一家之言_{三二}、雖_{三三}未能_{三四}藏_{三五}之於名山_{三六}、將_{三七}以傳_{三八}之於同好_{三九}。

『文選』四二「與楊德祖書」願わくは功勳を展べ、力を明君に輸すを得んことを。此の王佐の才を懷き、慷慨して獨り辭せず。……孔氏は詩書を刪し、王業築として已に分らかなり。我が逕に寸の翰を購せ、藻を流し華芬を垂れん。

『種蠶行』(趙幼文「曹植集校注」)また荀彧は曹操にむかつて、外で武功を定めると同時に内では言を立てよ、と次のように言う、

既に徳を立て功を立て、又兼ねて言を立つ、誠に仲尼の述作の意なり。制度を當時に顯わし、名を後世に揚ぐ、豈盛んならざらん

や。若し武事の畢るを須ちて後に制作し、以て治化を稽うるは、事に於いて未だ敏ならず。宜しく天下の大才通儒を集め、六經を考論し、傳記を刊定し、古今の學を存し、其の煩重を除き、以て聖眞を一にし、並びに禮學を隆んにし、漸く教化を敦くすべし。

則ち王道は兩つながら濟らん。『魏志』卷十荀彧傳注引『彧別傳』彼の言う立言は、聖人の教である六經を定め、さらには制度を確立し教化をおこすという廣い意味を持つが、こういう文化的事業をいちいち不朽と結び付けて説いている所が、この時代の特徴をよく表しているようだ。このほか『三國志』をめぐってみただけでも、立文とは必ずしも言わなくても、名を不朽に傳えるという發想を示したものが數多く目につく。(紙數の都合上それらについては割愛せざるを得ないが、例えは『魏志』卷四、十二、十五、『蜀志』卷二、五、十、十二、十二、『吳志』卷九、他、多數散見する)

もちろんどの時代の文獻にも不朽という言葉はあろう。しかしこの時代は、事あるにつけ不朽という考えを頻繁に持ち出しており、當時の人々にとっては、この不朽ということが大きな關心事の一つであったに違いない。宇同著『中國哲學問題史』(「死と不朽」)によれば、もともと中國の傳統思想には、君子は世を没するも名の稱せられざるを疾む(論語「衛靈公」と言うように、不朽が無視されていたのではないが、それに言及するものは極めて少なく、あまり注意を向けてこられなかったという。この見方によれば不朽ということが、この後漢末から三國の時代に俄然クローズアップされたと言ってもいいようである。不朽がなぜ、かくもこの時代の人々の心をとらえたのか、それはこの時代が漢族史未曾有の大轉換期であったからに違いない。それまで絶對視されていた漢王朝の急速な瓦解、打ち續く戦亂と、あらゆる

ものが一朝にして荒廢していく様、嘗ての中國の士大夫が經驗したことのないこの安定から崩壞への急激な變化を前にして、知識人達は人の一生のはかなさを衷心から感じたに違いない。だからこそ、この自分の生の證を人間の悠久たる歴史の中に永遠にとどめておきたいと願うようになった。滅亡してゆく個を發見したとき、それまでの人々は神仙に望みを託したり、不朽長生術を試みたり、或は一轉して享樂主義の態度に出たりしたのであるが、比較的合理的の精神に満ちて前向きな人生態度を持っていたこの時代の人々は、それらによりも一層、功德を打ち立て、一家言を成すことによって、聲名の不朽性を勝ち取ることに目をむけたのである。曹丕の文章不朽説も、實はこうした時代潮流の中にあつたのである。そして重ねて言えばそれは、傳統的三不朽説のくり返しに過ぎないという意味において、また今述べたように、大きな時代思潮の一端に過ぎなかつたという意味において、ことさらに文學の獨立價值を宣言した、などという性質のものではなかつたのである。

自分の生命が世界の中でなんとものはかないものであることに思い至つたとき、ただちに個の永遠性を願ひ、世界に自分なる個が存在した證を殘そうとするのは、人類の精神發達史の上から言えば、ある意味ではまだ幼稚な段階にあるのかもしれない。一度こうした時代を経てきた古代知識人は、以後同じような時代狀況に遭遇しても、かくも不朽性にこだわらねばならないことはなくなつたのではなからうか。もちろんそれには、佛教が以後の知識人の思想を捉えたことなども考え合わせねばならぬだろうが、これは小論の範圍を越えることである。

(11)

「典論論文」の文章不朽説が、文學に新しい價値付けをもたらしたものでなかった以上、この時代の文學への認識がそれ以前とは何ら變わる所がなかったかと言うと、もちろんそうではない。文章不朽説とは別な所に、いくつかの新しい文學現象が出現してくるが、それはこの時代の文學及び文學批評が、今日的な意味での文學及び文學批評の實體を、いろいろ俱え始めてくることを意味している。そしてそこには、自ずと文學思想の新しい時代の到來を感觸せしむるものがある。

前節で見たように、嘗てない大規模且つ急激な變動期に處した知識人達は、一家言的著作が個人の聲名を不朽のものにしうることに、強い關心を示していた。そうした場合、文學作品がその對象から除外されていたということは、彼らが辭賦、章表等の文學と、一家言的著作とを畫然と分けていたことを意味し、それは却って彼らの文學觀念が、ほぼ今日的な意味での文學觀念にまで純化していたことを示している。曹丕の場合、「典論論文」では、前段で文學について各方面からの評論を行ない、後段で一家言的文章の不朽性について述べており、二月三日付け吳質への手紙『文選』卷四二では逆に、まず一家言的文章の作者について論評し、その後詩賦、散文作家について文體評を行なっている。この分け方はいずれも分明で、兩者の境界に曖昧たるものはない。しかもこの文學と一家言とは、創作する立場から言っても、その意味するところ、重み、が異なっている。「典論論文」では、人閒というものは努力を怠りがちで、ややもすると生活に流され、著作を著して千載に名を残すという大事業を、おろそかにしてしまふものだと言っていたが(前節)、そういう言い方から曹丕が、一家

言的著作を強力な意志のもとで、努力の結果勝ち取られるものと考えたことがわかる。そこには、謹嚴な著作者の重々しさはあつても、

毎至鵲酌流行、絲竹竝奏、酒酣耳熱、仰而賦詩。

『文選』卷四二「吳真賞書」

という娛樂に打興する詩人の姿は見えない。

それでは詩賦、章表などの文學について、曹丕はどう思っていたのだろうか。同じ吳質への手紙の末段で、彼は吳質にむかつて、

頃何以自娛、頗復有所述造不。

と問いかけている。何を以て自ら樂しむか。その方法にはいろいろある。博奕などの室内ゲーム。狩獵等のスポーツの娛樂。酒飲彈琴の風雅な遊び。そうした趣味、娛樂の中で「述造」することの樂しみをとらえ、最近作品を制作したかどうかを尋ねているのである。つまり曹丕はここで、文學制作を博奕や彈琴と同じように、個人的な娛樂、趣味の次元のものだと見做しているのである。ここには政治や道德のために、という大上段に構えた姿勢はない。ところが彼以前の漢大賦の作者達は、多くは長い時間と莫大なエネルギーを費やして賦作に執着したが、その動機は帝王に供覽するためであったり、風刺を盛り込むためであったり、ある種の利益を獲得するための才學披露であったり、必ずしも創作それ自體が、軽い娛樂性を持つものではなかった。むしろ桓譚などは、賦作は心身を疲弊させるものだとさえ述べている。しかし曹丕の場合は、文學創作が作者自身のひそかな樂しみ、自己完結的な趣味的次元で意識されているのである。またカタルシスの機能を持つ詩歌創作は、楚辭以來の傳統があるが、これはそうした發奮抒情の創作態度とも異なる。文學創作に對するこうした認識は、

この時代以前には見いだすことはできない。今これを假に趣味的文藝観と呼ぶことにすれば、この趣味的文藝観の成立は、この時代の新しい文學認識を特徴づけるものの一つである。さらに同じ手紙の、文人、文體批評をなした所で、元瑜（阮瑀）について、

元瑜書記翩翩、致足樂也。

と批評する。阮瑀はもともと、官府の公文書類に優れた文才を發揮した人物で、曹操の「軍國書檄」は陳琳と共に阮瑀の筆になったものが多い（『魏志』本傳）。「書記」は政治や實用方面に用いられた文章だが、曹丕はその阮瑀の書記を、致きは樂しむに足る、と評しているのである。ここには、公文書類を實際の用途から切り離して、その作品のできばえを文藝的娛樂として、趣味的に樂しんでいる態度がある。また曹洪（陳琳）は曹丕の書簡を受け取り、それを評して次のように述べて、

得九月二十日書、讀之喜笑、把玩無厭。

續けて、この返事をしたためる所以を、

亦欲令陳琳作報、琳頃多事、不能得爲。念欲遠以爲權、故自竭老夫之思。辭多不可一二、粗舉大綱、以當談笑。

『文選』卷四一陳琳「爲曹洪與魏文帝書」

と述べる。ここにも相手の手紙を讀むことを、何かの娛樂のように樂しみ、かつまた自分の手紙を、相手の談笑のかたにしようという娛樂的態度が、あからさまに表明してある。

次に曹植の場合はどうか。彼は公的生活の場では、政治的軍事的功績をあげるのが男兒として、最も價值あることだと見做していた。これは彼が若いときから死ぬ直前まで、一貫して持ち續けた人生觀で、それ故に迫害を受ける後半生は、ますます悲劇的になつてゐるのだ

が、楊脩宛ての手紙（前出「與楊德祖書」）でも、そうした考え方を表明している。

吾雖德薄、位爲藩侯、猶庶幾勳力上國、流惠下民、建永生之業、留金石之功、豈徒以翰墨爲勳績、辭賦爲君子哉。

最後の「ただ翰墨、辭賦を以て勳績、君子となさんや」の言い方は、太子擁立をめぐる曹丕との抗争という状況の中で、彼の經世の才よりは、文筆の才をより高く評價しがちだった世論を、多分に意識しての發言だったであろうが、この「力を國にいたして恵みを民に流し、永世に傳えられる功業をうちたてる」というのは、彼の偽らざる最大の願いだつた。しかし彼は人生に對して一段構えではない。功業が立てられない場合はどうするか。その時には、

若吾志未果、吾道不行、則將采庶官之實錄、辯時俗之得失、定仁義之衷、成一家之言。雖未能藏之於名山、將以傳之於同好。

と「一家之言」を成すことを言う。この一家言的著作は文脈の上から考えても「時俗の得失を辯じ、仁義の衷を定む」というように、曹丕の「典論論文」の場合と同様、政治的道德的考察と、教訓とを中心にしたものであつて、辭賦等の文學作品を指すものでないことは明らかである。また「一家之言」の典故という側面から考えても、李善注が「典論論文」とこの部分に、ともに司馬遷の「報任少卿書」を以て注するように、（曹丕や）曹植には、例えば史記のような大著こそが一家言（「不朽」と意識されていたに違いない。そしてこうした第一に功業、第二に一家言という二段構えの姿勢が、彼の公的生活の場での價值序列を持った人生の理想だったのである。ではこのような價值序列にたいして、文學および文學創作の營み

は、どのように位置づけられるのか。彼は言う、

辭賦小道、固未足_レ以_レ揄揚大義、彰_レ示來世也。昔楊子雲先朝執戟之臣耳、猶稱壯夫不_レ爲也。

ここで「大義も揄揚できないし、來世に彰示することもできない」というのは、辭賦文學には政治、道德に資する效用もなく、後世に不朽に顯示することもできないということの意味する。これは一家言的著作に對するのと、全く反對の考え方である。このように曹植は、(辭賦)文學には政治的道德的效用がないことを斷定し、第一に功業、第二に一家言という價值序列の觀點からは、文學創作の營みを、楊雄の言を引くように潔しとはしない。だがこれを以て曹植が、文學の價值を否定していたと考えるのはやや早計であろう。彼はただ文學には政治的道德的價值がない。と言っているに過ぎないのであって、文學の價值の全面否定などをやっているのではない。またそれは、第一に功業、第二に一家言という、公的生活の場での價值序列から、文學創作の行爲を輕んじたにすぎない。實際には、彼は文學を否定したり輕視したりしたところか、同じ手紙の前段では、文學への生來的な愛好と熱中ぶり、文學創作への非常なこだわりと自信とを、吐露してはばからないのである。まず彼は手紙の冒頭で、挨拶文もそこそこに、いきなり、

僕少小好爲_二文章_一、迄_レ至於今、二十有五年矣。

と書き出す。生まれてからこのかた、一貫して文章創作を愛好し續けたというが、これほど自分の文學愛好癖を、何のこだわりもなく直截にぶちまけるのも、當時にあっては珍しい。土たるものは、政治教化に關わりあうのが第一だとされていたわけだから、こうしたことを何はばかることなく公言できる状況では、まだなかったのである。この

文學癖の大膽な表明の後、文人批評が述べられ、さらに續けて自己の文章の添削について、

世人之著述、不能無病。僕常好_二人譏_レ彈其文_一、有_二不_レ善者_一、應_レ時改定。

という。他人が自分の文章の缺點を指摘してくれることを歓迎し、缺點があればすぐさま修正したというが、彼は自分の文章のでき具合にかくも注意をほらい、その態度は眞剣でさえある。彼はまた、丁敬禮(丁廙)が添削を求めてきたときの話をあげて、

昔丁敬禮常作_二小文_一、使_二僕潤_レ飾之_一。僕自以才不_レ過_二若人_一。辭不_レ爲也。敬禮謂_レ僕、卿何_二所疑難_一。文之佳惡、吾自得_レ之、後生誰相_二知定_一吾文_一者耶。吾常歎_二此違言_一、以爲_二美談_一。

という。これは實は、曹植が自分の作品一巻を楊脩に贈って添削を頼んだことを、楊脩が遠慮して辭退するのではないかと心配して、遠慮せずどしどし缺點を指摘してくれるよう、半ば勵ますつもりで、かくも用意周到に丁敬禮の話を持ち出してきているのである。曹植は自分の辭賦作品を、不斷に完成品へと近づけるために、少しもゆるがせにしようとはしない。文學創作の營爲は、私事ではあっても、彼にとつてはかくも熱心にならざるを得ない、大事なことだったのである。

このように、辭賦には政治的道德的效用はないとした同じ手紙の中で、曹植は辭賦文學への傾倒ぶりと、創作への非常な熱意とを表白している。これは彼が、政治、道德とは別の次元の私的な趣味的な生活の場で、辭賦文學を大いに肯定していることを示す。ここにも曹丕の場合と同様、個人的趣味的なものとして、文學をとらえる態度を見いだすことができる。

ところで楊脩は、曹丕が立功、立言に對して文學を輕んじた發言

を、その返書で、

若下乃不忘_二經國之大美_一、流千載之英聲、銘_二功景鐘_一、書_二名竹帛_一、斯自雅量素所_レ蓄也。豈與_二文章_一相妨害哉。

『文選』卷四十一「答臨淄侯_二鑒_一」

と反論し、立功、立言の不朽の事業と、文學創作とが互いに干渉しあわないものだと言っている。つまり曹植が公的生活の次元で、經國の事業と文學創作とを對立させて考えていたのに對して、楊脩は文學を公的生活の場へ引きずりだす必要がないと考える。經國の事業と文學創作とは、次元のことなる事柄で、同一土俵内で論ぜられるような性格のものではない、というのである。これは文學の價値が、政治的・道德的效用とは關係なく、私的生活の場では嚴としてあるんだという考え方で、ここに至って我々は、個人的趣味的文藝觀の成立を、はっきりと確認することができるのである。

(三)

では趣味的文藝觀と言った場合、文學の何を趣味的個人的に享受するのか。それは現代人の立場で考えれば、逃避、消遣、娛樂のためのものであったり、人生省察のものであったり、或いは例えば俳句作りの樂しみであったり、作者、讀者の側から色々な享受の仕方、樂しみ方がありうるだろうが、この時代に際だっているのは、文學作品の文采を樂しむという姿勢である。もともと曹丕が「詩賦は麗ならんと欲す」(『典論論文』)と述べたように、この時代は文采が重視され始めた時代であるが、作品の思想、内容とは別個に、特に作品の表現、形式美を取り立てて玩弄し鑑賞しようとする態度が、この時代になると著しくなってくる。

下蘭は太子に立てられた曹丕を、

竊かに見るに、作る所の典論及び諸賦頌、逸句爛然として、沈思泉のごとく涌き、華藻雲のごとく浮かび、之を聽かば味を忘れ、奉讀して倦むこと無し。

と稱揚し、同じく賦を作って、

典憲の高論を著わし、敍歡の麗詩を作り、文章の常檢を越え、不學の妙辭を揚ぐ。『全三國文』卷三十贊述太子賦并上賦表

という。この褒辭はだいたい割り引いて讀む必要があるが、曹丕の一家言的著作の『典論』及び賦頌類の文學作品を、内容については殆ど言及せず、特に形式美(音律も含む)を取り上げて批評をしている。曹植は、自分の賦集を編むに序して(『前祿自序』)、

故に君子の作や、儼乎として高山の若く、勃乎として浮雲の若く、質素なるや秋蓬の如く、藻を擲くや春葩の如し。

といい、襪履を天子に獻上するに當たって、

先臣或いは之が爲に頌す。臣既に其の嘉藻を玩び……

「多至獻襪履表」

と述べ、「七啓」の作に敍して、

昔枚乘七發を作り、傅毅七激を作り、張衡七辯を作り、崔駰七依を作る。辭各の美麗なり、餘之を慕う有り。『七啓序』

その表現の美しさを願ひ、玩弄する態度を示している。もちろんそれ以前にも、とりわけ辭賦文學については、その表現の美麗さを認める發言は少なくない。しかしそれらは殆ど文脈としては、美麗さゆえに政治教化に益なしとか、益ありとかの話につながり、政教への効用性から離れることはなく、この曹植の言のように、屈託なく文采の美し

さへの傾倒を表すものではなかつた。

さらにこの時代には文人評、文體評、作品評などの批評的氣運が勃興してくるが、そのなかでも相手からもらった手紙を、文學作品として批評するというのは、恐らくこの時代に始まった新しい現象である。その批評の在り方を見ると、そこにもやはり作品の形式美を、ひとまず内容から切り離して稱賛するというやり方が見られる。繁欽が曹丕に歌唱のすぐれた人物を推薦し、その歌いぶりを手紙で稱賛して書き送ったが、曹丕は後でその繁欽の手紙を振り返って、

欽、賤、選して餘に與え、盛んに之を歎ず。其の實に過ぐと雖も、其の文甚だ麗なり。

『文選』卷四十繁休伯「與魏文帝賤」李善注引文帝集序と述べている。曹丕はその手紙文を、誇大表現をしていて事實にそぐわぬ缺點があることを指摘しつつも、その文章表現は相當に美しいと褒めてゐる。この批評の仕方は、内容の眞實性と表現の美麗さとを分けており、眞實性という批評規準からではなく、それとは別に、手紙文を形式美の観点からだけで見ている。また曹植、吳質間の往復書簡では、曹植は吳質の手紙を、

得所來訊、文采委曲、擘若春榮、瀏若清風。

と褒め、吳質は曹植の手紙を、

信到、奉所惠脫。發函伸紙、是何文采之巨麗、而獻喻之綢繆乎。

と持ち上げ、同時に、自分の手紙を曹植が稱賛してくれたことを、又所答脱、辭醜義陋、申之再三、赧然汗下。と謙遜する。同じく曹植、楊脩間の往復書簡(前出)では、楊脩は曹

植の手紙を、

損辱嘉命、蔚矣其文、誦讀反覆。雖諷雅頌、不復過此。

〔答臨淄侯〕賤

とべたばめする。互いの手紙のやりとりなのに用件や内容とは別個に、まるで時候の挨拶か何かのように、文學的批評をしながら贊辭を贈る。しかもその贊辭はみな文采の美しさを稱しており、それが一つの書式のようにさえなっている感がある。今日からすると、返書の中で相手の手紙文に一々文學的観点からの批評をするなどというのは考えられないが、手紙文が公開の性格を持つ文學の一ジャンル、とみなされてきた古典中國では、ありえないことではない。しかしそうした中國でも一つの時代、人脈の中で、かくも集中的に手紙文の形式美に對する文學批評的贊辭が出現してくるのは、この時代の一つの特徴であらう。

それは文學史の観点から見れば、後漢時代にいよいよ傾斜を深める散文の美文化、駢文化の傾向が、手紙文にまで及んでゐることを示しているが、文學思想史の観点から見れば、二つの意義を見いださう。つまり第一には、それは従來の作品批評が『詩經』や賦頌に殆ど限られていたことを思い合わせると、評論對象の擴大だと考えることができる(後述参照)。第二には、この批評の在り方を見ると、文采の美しさを手放して、それ自身の價值として喜んでゐる。ところがそれまでの文采に對する見方は、墨家や道家のように人爲的な文采を否定するものや、儒家のように文采の必要性は認めてはいるものの、政教への效用の下に隷屬させるものが主であつて、文采にそれ自身の價值を認めることは殆どなかつた。とするならば、それはこの時代の文采觀に、一つの確實な變化が起つてゐることを示していると言え

る。

とは言ってもこの時期に時代全體の文采觀が、文采否定や文采隸屬説から文采自身の價値を認める考え方に、全面轉換してしまつたなどというのではない。もちろんこの時代にも

當に翰を飛ばし藻を騁せ、時事を光贊し、以て楊班張蔡の疇を越ゆべし。
『吳志』卷二十華覈傳

のように、政治教化への效用に從屬させて文采を考えるものや、著作、書論の文章についてはあるが、

故に作者は其の辭麗を尙ばずして、其の道を存するを貴ぶなり。

其の巧慧を好まずして、其の義を傷るを惡むなり。故に夫の小辯道を破り、狂簡の徒、斐然として文を成すは、皆聖人の疾む所なり。
桓範『世要論』序作篇

と述べて、道學者先生のように文采を敵視するものなどがある。こういう傳統的な考え方は封建時代を通じて消滅することはなく、むしろ文采觀のもう一つの主流でさえあり續けた。しかしこうした傳統的な文采觀の流れが一貫する中に、文采自身の價値を認めるような文采觀の流れが生まれ出たことは、やはり文學認識の新しい時代の始まりを示すであろう。

ところでここで一つ見落としてならないのは、文采がこのように一人歩きを始めた時代に、一方ではまたその文采の存在理由を説明しようような考え方が出されていることである。秦宓がある人に、あなたは隱者を志向しているはずなのに、どうして文采を發揮して外に示しているのかと問われ、彼は孔子や接輿や魚父の例をあげながら、彼らが世に名を知られているのは自己の内にあるものが自然にそうならしめたのであって、意圖してのことではなかったと答える。そしてそ

れはちょうど虎や鳳の五色の才が、先天的なものから自然に發し、わざわざ飾り立てようとしたのではないのと同じだといひ、さらに文采は君子の徳を傷つけるものではないと付け加える。

夫れ虎生まれながらにして文炳あり、鳳生まれながらにして五色あり、豈五采を以て自ら飾畫せんや。天性の自然なり。蓋し河、洛は文由り興り、六經は文由り起る。君子は文徳を懿す、采藻其れ何ぞ傷まんや。
『蜀志』卷八秦宓傳

秦宓のこの言ひ方は、文采を積極的に主張するのではないが、文采は天性から自然にそうなるのであって、おし留めたり隠したりできるものではなく、必然の結果なのだという考え方を示している。これは文采を輕視したり、敵視したりする保守的な考え方に對する、強力な反論となることができ、文采を肯定するものにその理論的根據を與えることになる。これは、文采が「自然」の在り方の必然の結果だと考える『文心雕龍』（原道、情采篇）の發想と酷似するが、この時代に早くもそうした考え方が出現していたことよりも、文采が一人歩きし始めた時に、文采を肯定し理論的に説明しようするような考え方が同時に存在していた事實に、私はより注目したいと思う。

ところで文采の價値を認め、それを鑑賞する態度は、この時代には文學作品が吟誦され始めていることとも密接な關連がある。『楚辭』や漢大賦は前漢でも既に朗誦されていたが、この時代には趣味的に作られた辭賦類はもちろん、相手からもらった散文の手紙文でさえ、しばしば吟誦されているのである。前出の曹植、吳質の往復書簡では、曹植が吳質の手紙を、

得所來訊、文采委曲……申詠反覆、曠若復面。
と文采を味わいつつ、繰り返し吟誦しており、主に辭賦と考えられる

が、曹植がさらに、

其諸賢所著文章、想還所治復申詠之也。可令豪事小吏諷而誦之。

と述べ、吳質がそれに、

此邦之人、閑習辭賦、三事大夫、莫不諷誦、何但小吏之有乎。と受け答え、一方、曹植の賦頌等の作品を、

還治、諷采所著、觀省英璋……

と述べている。また楊脩は曹植への返書(前出)で、曹植の手紙を、損辱嘉命、蔚矣其文、誦讀反覆。雖諷雅頌、不復過此。

と繰り返し朗誦しており、添削を求められた曹植の辭賦にも、輒受所惠、竊備臆賤誦詠而已。

と答えている。このように、作品を吟誦するというのはその音律をも味わうことで、文采を賛美することと合わせて、文學作品としての出来栄を全體として鑑賞することである。だから文采を稱賛するという態度が、この時代に顯著になってきた時に、同時に吟誦するという發言が出てきたのも、いわば當然の關係でもあったわけである。

ただし文學作品を鑑賞するとは言っても、この時代は職業的批評家のように、冷靜に作品に臨むのではない。前節で述べたように、それは個人的娛樂的趣味的な讀者の姿勢である。曹植から「龜賦」を贈られ、それに答えた陳琳の手紙は、誦讀するさいの態度がまさにそうした姿勢であることを示している。手紙は「龜賦」の文采、音律を褒め評した後、最後に、

載權載笑、欲罷不能。謹韞檀玩耽、以爲吟頌。

『文選』卷四十一「答東阿王牋」

と結ぶ。彼は曹植の「龜賦」が面白くてやめられず、大事にひつに收

めて賞翫し吟誦しようというのである。作品をこのように吟誦し樂しむ彼の態度から、我々はここにも趣味的文藝觀の成立を見て取ることができる。前節で述べた趣味的文藝觀の成立と、本説の文采の一人歩き、および作品の吟誦とは、このように不可分のものとして密接に結びついていたのである。

(四)

文學評論の氣運が勃興したことは、この時代の特徴の一つであるが、今日殘されているその一次資料は、わずかに「典論論文」や『文選』所收の數篇の書簡文、及び『文心雕龍』に數條引かれている曹操、曹植、劉禎らの評論文の片鱗にすぎない。もちろんこれだけの資料からだけでも、この時代の文學評論の興隆を見るには十分であるが、さらに曹植「與楊德祖書」(前出)などの資料からも、間接的にはあるが當時の旺盛な評論活動の一端を窺うことができる。それに、

以孔璋之才、不閑於辭賦、而多自謂能與司馬長卿同風。譬畫虎不成、反爲狗也。前書嘲之、反作論盛道僕讚其文。

というくだりがあるが、これによると陳琳と曹植との間に、文學評論的書簡があったことになり、

劉季緒才、不能逮於作者、而好詆訶文章、掩摭利病。

というところから、劉季緒にも作品批評の發言があったことがわかる。さらに、

僕常好譏彈其文。有不善者、應時改定。昔丁敬禮、常作小文、使僕潤飾之。

というあたりからは、曹植の周邊に、作品評論を行なう氣風が濃厚であったことがわかる。曹植自身、初めて邯鄲淳と面談したとき、

是に於て乃ち衣幘を更著し、儀容を整え、淳と滉元造化の端、品物區別の意を評説す。然る後に羲皇以來、賢聖名臣烈士の優劣の差を論じ、次に古今の文章賦詠を頌め、當官の政事の宜しく先後する所に及ぶ。又、用武行兵倚伏の勢を論ず。

『魏志』卷二王粲傳注引『魏略』
というように、古今の文學賦詠をも褒め論じたとある。

ではこのように言論文章を問わず、活發に行なわれた評論活動の性格は、一體どういふものであったのか。本説では先學の論者とできるだけ重復しないよう、以下の二つの點に限って論じてみようと思う。

まず批評對象の擴大について。漢代、作品批評と言へば『詩經』や『楚辭』など半ば聖典化されたものか、或は著名な大賦についてかを中心であつた。ところがこの時代になると、そうしたもののほか、作者の身邊にいる同時代の作家達の韻文、散文の小篇をも、批評對象にのぼせるようになってくる。前節でふれた相手の手紙文への批評などはその典型であろう。曹丕の「與吳質書」「典論論文」は、同時代の作家達を章表、書記、五言詩などの文體を取り上げて批評しているが、これ自體がそれ以前とは異なる批評對象の擴大を意味している。そのほか純粹な文學批評ではないが、そこにもう一つ文學として見ている讀者の目が、自ずと感ぜられるものがある。例えば次の曹丕の評。曹丕が、

淳此を作り甚だ典雅なり。斯れ亦美なり。朕何を以て之に堪えんや。其れ帛四十疋を賜う。

というのは、邯鄲淳の符命の文體である「受命述」の作品を褒めているのであり、

月二十八日の表を得、侯が情を推して、先王を河上に祭らんと欲

するを知る。上下を覽省し、悲傷、感切す。『太平御覽』卷五二六というのも、曹植の表の文體である「求祭先王表」を評しているのである。また曹植は、明帝が娘の夭折を悲しんで作った「平原公主詠」を贈られ、「答明帝詠表」で、

詔を奉じ、並びに聖恩の作る所の故平原公主詠を見る。文義相扶け、章章殊に興り、句句感切し、神明を哀動し、天地を痛貫す。

楚王臣彪等、臣が爲に讀むを聞き、涕を揮わざる莫し。

と答えたが、これも曹植が、彼自身の周邊の作者が作った詠の文體の作品を評しているのである。このようにこの時代の作品評は、それ以前に比べて批評對象の範圍が格段に廣がり、比較的身近な小篇の作品にまで批評が及んでいたのである。そしてその事實は評論活動の隆盛をそれ自身で物語っていると同時にまた、あらゆる文章を文學としてみようとする目があつたことをも示している。

第二は、作家の個性、文風への批評の在り方について。曹丕の二月三日付け吳質への手紙に、次のように言う。(前出)。

孔璋章表殊健、微爲繁富。

公幹有逸氣、但未適耳。其五言詩之善者、妙絶時人。

元瑜書記翩翩、致足樂也。

仲宣續自善於辭賦。惜其體弱、不足起其文。至於所善、古人無以遠過。

曹丕はここで、陳(琳)孔璋、劉(楨)公幹、阮(瑀)元瑜、王(粲)仲宣それぞれ作家に、章表、五言詩、書記、辭賦等の然るべき文體を取り上げつつ、その文體の風格について批評を加えると言う形を主にし、各作家の個性を明らかにしている。もちろん、ある作家にその文體が取り上げられていること自體、既に一つの批評行爲の結果

であることは言うまでもない。これは謂わば、文人、文體批評が一體となった形である。このように文人批評と文體批評とが結びつのは、中國古典文學では、少なく見積つても文體の種類がすぐ二十近くにはなつてしまい、文學作品は作者の立場にたつた場合、具體的な文體を離れては存在しえず、しかもその文體にはそれぞれ獨特の傳統的な作法と風格とが要求され、作者自身に得手不得手の文體が、自ずと定まってくるからである。そこに、文人批評が文體批評と一體のものとなつていく必然性がある。これは多かれ少なかれ一般的にも言えることであろうが、文體分化の異常に發展した中國古典文學では、特に顯著である。この文人、文體同時批評の形は、中國古典文學批評の基本形式であるが、それが文學評論が本格的に開始したこの時代に、既に始まつていることを我々は確認することができる。もちろんさうした文人、文體批評の前提には、この時代までに細かな文體創作がずいぶんとなされておき、次の邯鄲淳の例にも見るように、文體觀念も相當に嚴密になつている背景があつた。曹丕が即位したとき、邯鄲淳はその聖徳を稱揚した作品を、頌とも賦とも呼びがたいと逡巡して、次のように述べている。

臣、疾を抱き靡に伏せ、書一篇を作る。之を頌と謂わんと欲すれば、則ち盛懿を雍容し、玄妙を列伸する能わず。之を賦と謂わんと欲すれば、又、洪烈を敷演し、緝熙を光揚する能わず。故に愚を竭くして、受命述と稱さんと思ふ。

『藝文類聚』卷十
このように彼は各文體の意義に、かなり嚴密な態度を持しているのである。

また「典論論文」の次の一段では、章表書記、と一括した散文體について、陳琳、阮瑀、應瑒、劉楨、孔融等の作家を、

琳・瑀之章表書記、今之雋也。

應瑒和而不壯、

劉楨壯而不密。

孔融體氣高妙、有過人者。然不能持論、理不勝詞、以至乎雜以嘲戲。

と評す。曹丕は今度は、章表書記をひとまとめにした一つの政治的實用的散文體の枠内における作家達の風格の違いを述べる、という第二の批評形式を取りながら、互いの個性を分明にしている。このように、曹丕の批評眼は二つの批評方法を用いながら、いずれも作家の個性の問題にびたりと照準を合わせている。また曹洪が、陳琳に代作させた手紙を、自作だと強辯しつつ曹丕に贈ったことがあるが、曹丕は結局それが陳琳の筆になるものと見破つた。

上、漢中を平定し、族父の都護、書を選して餘に與え、盛んに彼方の土地の形勢を稱す。其の詞を觀れば、陳琳の絞し爲る所なるを知る。

『全三國文』卷七

これは曹丕が單に、作家の個性に注目してただけでなく、作家達の個性的文風を辨別しうる鑑賞力をも具えていたことを物語っている。ところがこれ以前の兩漢までの文學批評は、いかに政治道德に奉仕せねばならないかという問題や、それに關する、作品の内容と表現形式の問題とが主要な關心事であつて、作家の個性の問題にはまだ至つていない。例えば司馬相如、楊雄、班固、張衡等おなじ辭賦作家であっても、彼らの個性、風格を比較したり批評したりするものが、同時代人にいないことを想起してもらえればよい。批評家の目が、作家達の個性の違いにまで及んでくるのは、ようやくこの時代になつてからである。

しかし曹丕が批評家として優れているのは、個性、文風の違いへの着目からもう一步踏み込んで、その違いの由つて來たる原因まで考えようとしていることである。「典論論文」をよく見れば、彼はその原因を二つの方面から考えていたことがわかる。一つは作家の側から考察し、その原因を作家が先天的に有する氣の違い、氣の清濁にあると考えていた。

文以氣爲主、氣之清濁有體、不可力強而致。譬諸音樂、曲度雖均、節奏同檢、至於引氣不齊、巧拙有素。雖在父兄、不能以移子弟。

この氣の清濁が、作家の個性を説明するために持ち出してきた理論であることは、多くの先人が既に論じているのでここではこれ以上述べないこととする。

「典論論文」ではこの氣論のすぐ前に、八體四科の文體論を述べたくだりがあるが、實はこの文體論は、作家の個性を説明しようとする動機と深く結びついており、決して純粹な文體論のための文體論を説いているのではない（論證は拙論参照）。それに言う、

夫文本同而末異。蓋奏議宜雅、書論宜理、銘誄尚實、詩賦欲麗。この四科の提出にすぐ續けて、

此四科不同、故能之者備也。唯通才能備其體。

と述べるが、これはより曹丕の主旨に添った形で言い換えれば、各文體で要求される風格が、上記の例のように各様に違うので、一人でそれを全てこなすのは難しく、どうしても得意とする文體に片寄りが出てしまひ、そこに作家の個性が現われる、という事實を説明しようとしているのである。このことから我々は、曹丕が個性の生じるもう一方の原因を、氣論とは別に次のように考えていたと理解することが

できる。つまり、各文體が互いに異なる風格を要求するという文體觀と、天才以外、普通の作家は才能に片寄りがあるという人間才能論との、相乗の結果である。

このように曹丕は、作家の個性、風格の來源を二つの方面から、即ち從來言われてきた氣論の方面からだけでなく、さらに文體風格論と人才論との相乗作用の面からも見ていたのである。

そしてここで一つ注意しておきたいのは、この二つの個性來源の理論が先の二つの個性批評の形式と、密接に結びついているらしいことである。つまり、氣論が主に同一ジャンルに於ける個性の違いを説明するため、そして文體風格論と人才論との相乗作用論が、主に作家と文體との个性的結びつきを説明するため、それぞれ創案されてきたと考えられるのである。曹丕は、各々こうした批評理論の實踐的課題から、個性來源の理論を、一方で當時の思想界や人物評論の用語、理論を利用しながら創出してきたのである。

結びにかえて

最後にここまで論じ來たつて全編を振り返ってみると、この時代の文學思想が、人間の個という問題と常に鄰り合わせていたことに氣づく。作家個性への文學批評、個人的娛樂的な趣味的文藝觀、そして個の存在の永久の證を求めた不朽論等々。もちろんこの一事から、この時代の思想潮流全體の性格を見極めようとするのは、甚だ危険であるが、逆にこの文學思想の分野からは、人間の個の問題が常に底流にあったらしいという報告を、一材料として提出することができるのではなからうか。これを具體的な文學作品から檢證してみることが、また自ら別の作業であり、それは本論の課題とする所ではない。

注(1)

『文選』所收作品からの引用文の場合は、紙幅の都合上返り點のみを付けることにした。書き下し文および口語譯については集英社『全釋漢文體系』『文選(五、六)』を参照されたし。但し李善注等からの引用文には全て書き下し文を注記した。以下同じ。

(2) 網祐二氏「文體の變遷—南朝時代を中心として」お茶の水女子大學人文科學紀要第二卷一九五二、十二 同氏『中國中世文學研究』新樹社一九六〇 岡村繁氏「曹丕の『典論』論文について」支那學研究第二四、二五合併號一九六〇、十

(3) 澤田多喜男譯 八千代出版 下冊 一九七七、三 第二部第四篇第九章參照

(4) 蔡鎮翔氏「『典論論文』與文學的自覺」『文學評論』(北京)一九八三年第五期參照

(5) 晋代の資料だが司馬彪「九州春秋」の孔融に對する評もよく似た態度を示している。彼は孔融の政治的散文類を「及高談教令、盈溢官曹、辭氣溫雅、可玩而誦」(『魏志』卷十二崔琰傳注引)と述べている。

(6) 時代は晋に近いが高貴郷公が帝位にあった時、彼は文人を集めて文學論を綴ったという。「帝常與中護軍司馬望、侍中王沈、散騎常侍裴秀、黃門侍郎鍾會等、講宴於東堂、并屬文論。名秀爲儒林丈人、沈爲文籍先生。望、會亦各有名號」(『魏志』卷四高貴郷公紀注引傳暢「晉諸公贊」)

(7) 「六朝文學評論史上における文體分類論」(『中國詩人論—岡村繁教授退官紀念論集』汲古書院一九八六、十)

※ 最後に資料及び御教示を頂いた與膳宏教授に感謝の意を表します